

現代社会の倫理と創造性

— 「ものづくり文化」、利他精神、そして「環境の克服」 —

Ethics and Creativity in the Modern Society

— “Monozukuri Culture”, Altruism, and “Conquest of Environment” —

森 豪[†]

Tsuyoshi Mori

Abstract: This paper deals with the old, and new theme, that is, how we, the human beings live in our modern society. We faced the Eastern Japan Earthquake and Tsunami Disaster in 2011, 3,11. Our modern situation after the disaster is similar to what the oldest human beings faced. We can get our guiding principles to live in our modern society from the research of the history of the human beings' conquest of their environments. The human beings conquered the difficult environmental situation by the human minds' creative works. NHK's TV program, “Human” researched the growth of the human beings' minds from the oldest years of the human beings in the history of the conquest of the difficult environmental situations. Reading the book about the program, we tried to learn how the human beings conquered the difficult environmental changes by their minds' creative works.

1. はじめに

2011年3月11日以降の現代を生きる我々には、その日に起こった東日本大震災という出来事を抜きにしては、なにもものも考えられなくなった。それは、未曾有の、それまでの想像を越えた、我々の存在の根幹を揺るがせる出来事であった。その衝撃は、この日のこの出来事が、これからの時代と社会を生きる我々の、一つの起点にならざるをえないと言わせるものである。現代社会をいかに生きるか、何を大切なものとして、何に価値を置いて生きるか、そして未来に向かって、新たな社会をいかに創造していくか、どのような社会を築いていくのか、即ち「現代社会の倫理と創造性」について考える場合にも、この日のこの出来事との関わりのなかで、考えていかねばならない。本稿では、「現代社会の倫理と創造性」について、「ものづくり文化」、利他精神、そして「環境の克服」という視点から、考えていきたい。

2. 「ものづくり文化」と人間の心

文化について「人間がその精神的働きによって生み出した思想、宗教、科学、芸術などの成果の総体、物質的な成果の総体は文明として区別される」（明解国語辞典）という定義がある。この定義では、製造業に代表される「ものづくり」は、文明の成果であって、文化の成果ではないと言えるかもしれない。しかし製造された製品は、人間の精神的働きの結果生み出されたものに違いない。人間の精神的な働き、人間の心の働きの結果としての物質的成果である。「ものづくり文化」の視点は、ものづくりの根底に人間の精神的な働き、人間の心の働き、「思い」を見ようとするものである。

このような視点は、現代の動向の一つでもあり、経済学者の次のような言葉によって示された研究動向に一致するものである。

経済学はこれまで金銭的な活動や市場の機能を重視する形で議論を構築し、人々を物質的に豊かに

[†] 愛知工業大学 総合教育教室（豊田市）

することを重視してきた。・・・しかし、現在は精神面の豊かさ、自然災害に対する危機管理、新しい共同体意識の構築も主要な課題となっている。¹⁾

最近の経済学の動向として、経済活動における人間の精神的な働き、人間の心が注目され、研究されているというのである。

その具体的例としてなされたのが、東日本大震災による人間の心への影響についての調査である。その結果と考察が、東日本大震災からほぼ 1 年を経て、2012 年 3 月 2 日に発表された「戦災後の価値観」と題される記事である。そこには、震災が日本人に及ぼした価値観の変化を、全国規模のアンケート調査によって考察した結果と考察が記載されている。

調査は、2011 年 2 月と 2011 年 6 月に実施され、両者が比較されている。変化した価値観として注目されたのは、「他人を重視する利他的な価値観」と「精神面に与える影響の総合的な指標としての幸福感」であった。それらの調査の結果は、「利他性の向上、全国的に、『平穏な日常』を再評価」、そして「寄付活動、幸福感を高める」という小見出しの言葉に表現されている。震災の前後で、人間の心の働きにおいて、利他性が向上し、地震と津波によって、それまでにあった多くのものが根こそぎ失われ、平穏であった日々がいかに大切な日々であったか、今生きていることがいかに幸福であるか、ということに思い至った人が多かった。震災地に近い地域の人ほどそうであったという。また寄付行為が幸福感を高めたという。利他的行為が幸福感をさらに高めたのである。

経済学でも「ものの豊かさ」ではなく、経済を動かす人間の精神の働き、人間の心に注目する動向は、「ものづくり」の根底に、人間の精神的働き、人間の心の働き、「思い」を見ようとする視点と同じであるが、この震災に合わせるかのように、放映の始まったテレビ番組がある。その番組企画も、企画実現の一つとして、種々の学問の潮流が、最近では人間の心に注目し、「人間とは何か」をテーマとするようになってきているという事実から、実現したという。その番組は、20 万年前の人類の黎明期から、いかにして人間の心が生まれてきたか、を辿るもので、その人類の黎明期の姿は、東日本大震災で、なにもかも失って、荒廃した瓦礫の中に、ひとり裸同然で佇んでいる現代人の姿を彷彿とさせるものである。同じと言っていいものである。しかもその人間の心を扱った番組のテーマの一つが人間の利他性なのである。そして「ものづくり」が、その利他性に深く関わっているのである。次に、その番組について考えてみたい。

3. 『ヒューマン なぜヒトは人間になれたのか』

20 万年前の人類の黎明期から、人間の心の生い立ちを見ようとしたテレビ番組は、NHK 取材班による「NHK スペシャル ヒューマン なぜヒトは人間になれたのか」である。この番組は、2012 年 1 月 22 日に第 1 回の放映があり、全部で 4 回放映された。その内容は、2012 年 1 月 22 日に発行された単行本『ヒューマン なぜヒトは人間になれたのか』²⁾ (以下『ヒューマン』) に詳しくまとめられているので、単行本『ヒューマン』に沿って内容を見ていきたい。

この大型企画が実現した理由の第 1 は、先に述べた、さまざまな学問の潮流が、人間の心、「人間とは何か」というテーマに潮流が向かっていることにあった。さらに他に二つの理由があった。終章「なぜいまヒューマンなのか」によれば、この企画が実現した第 2 の理由は、「環境変動との相克」(412) ということであった。人間の祖先は、環境変動に幾度も遭遇し、遭遇するたびにそれを乗り越えようとし、乗り越えて飛躍を遂げた。環境問題は、まさに現代の問題である。東日本大震災を経験した現代人にとって、「環境変動との相克」は、切実な問題である。大震災、大津波は、「環境変動」であり、原発問題は、われわれが生きることをまさに危うくする問題となった。だれもが、子供たちの将来を思う。しかしせいぜい 20 年後 30 年後のスパンで思い浮かべるだけである。そうではなくて、200 年後、300 年後のことまで考えねばならないのではないか。そのスパンを与えてくれるのは、20 万年前の人類の黎明期に遡って考えることではないか、というのである。20 万年に比べれば、200 年、300 年は短いものと言えよう。東日本大震災を経験した我々は、はるかなスパンをもって人間を見つめ、人間の本質を知ることによって、復興への、創造への力づけを得られ、またどのような点に気をつけねばならないかが分かってくる。それは、まさに第 3 の理由と関係してくる。第 3 の企画実現の理由とは、「人間の本質を知る必要が各段に増しているということ」(415) である。「環境変動」の真の克服は、人間の本質を知ることによるのである。それは、人間の根源的な姿を知ることでもある。20 万年前の姿であっても、東日本大震災で、すべてが破壊され、流され、荒廃した瓦礫のなかに、何もなく、生身の人間として佇む姿に通じてくるのではないか。文明の一切が失われた姿は、原始の人間の姿とも言えたのではないだろうか。大震災を経験した我々の目には、はるかな黎明期の人間は、まさに現代人と同じ地平に立っているように思われる。

4. 協力する人間と「ものづくり文化」

『ヒューマン』第1章（番組では第1回放映）のテーマは、「協力する人・アフリカからの旅立ち～分かち合う心の進化～」である。ここで、最初の人間は、協力する人であり、分かち合う心をもってはじめて人間となったことが述べられる。利他性が人間を形成したのである。そしてその表現として、「もの」がある。「ものづくり」をしたのである。その証拠は、2010年4月に取材班が向かったアフリカのブロンボス洞窟にあった。その洞窟の10万年前の地層から出土したのが、オーカーと呼ばれる酸化鉄の石の塊であった。その頃のホモ・サピエンスは、せいぜい30人程度の近親者の集団の居住者で、洞窟周辺で狩猟生活を送っていた。この洞窟から、骨器や石の尖頭器が出土し、調理用の囲炉裏も見つかった。ここからホモ・サピエンスの黎明期の姿が想像されるが、血縁中心の小集団で、道具を使用し、洞窟周辺で動物や魚貝を食糧としていた。骨器には精巧に加工された錐もあり、ホモ・サピエンスの技術力が発揮され、ものづくりがすでに始まっているのが分かる。オーカーは、装飾や化粧に使用されたと推測される。オーカーの背後には象徴的思考の存在がある。「ものづくり」の背後の人間の精神的働き、人間の心の働き、「思い」がある。「ものづくり文化」である。かれらの間にコミュニケーションが存在し、コミュニケーションの道具として使用されていたと思える。

取材班がオーカー以上に注目した「もの」がある。貝殻に穴を開けたビーズの出土品である。ビーズは人の手で作られ、骨製の道具で穴を開けたらしい。その穴を開ける技は、かなり熟練したものとされる。これが何のためにつくられ、使用されたのか。それは、「ものづくり文化」の視点である。結論的に言えば、それは「分かち合う心」によるものであり、協力のためである。利他性である。

「もの」の背景にある「思い」、「もの」をつくりだした「思い」を見つめるのが「ものづくり文化」的視点であるが、ビーズの底にある「思い」を知るために取材班は「もっとも祖先に近い暮らしをしている集団を訪ねること」(27)にした。そこで、2010年7月に訪れたのが、アフリカのカラハリ砂漠に住むサン族であった。サン族は食糧を分かち合う。その分かち合いについて、次のように説明されている。

彼らの社会でもっとも嫌われるのは、ケチと自慢です。生き残るためには分かち合うことがとても重要だったのだと思います。最悪なのは身勝手に村の生活の

歩調を乱す人です。サンの人たちの生活スタイルを見てみると、一番根源的な人間の生き方、私たち人間に共通している特徴が見えてきますね。(34)

分かち合わない人は、集団から追放され、孤立して生きることになる。集団での生き方、倫理が確立している。それに反する者は追放されるのである。集団の倫理の最終目標は、「生き延びること」である。生存を至上の目的とする集団を危うくする者は、集団から除外される。サン族は、首飾りを与え合う。それは、「分かち合う心」から出ている。10万年前の出土品であるビーズも、「分かち合う心」が相互に親愛の情を示すために使われたのであろう。協力であり、利他性である。

そのような協力を育んだのは、何であろう。取材班は、チンパンジーと比較して、「分かち合う心」がホモ・サピエンス特有のものであるとし、次のような説明をあげている。

協力はヒト科の非常に基本的な特徴で、私たちの進化の初期段階ですでに現れた社会的特徴です。私たちホモ・サピエンスの協力は攻撃のためではなく、自分たちを保護するために必要だったと思います。捕食に対する脆弱さが、初期ヒト科にとっては、協力のより決定的な要因だったと思います。(60)

ホモ・サピエンスの脆弱さが、協力を生み出した。生き延びるために協力が必要だったのである。「分かち合うことが人間を人間たらしめている基本的な行動のひとつ」(42)なのである。

ホモ・サピエンスが自分の脆弱さを意識し、協力で生き延びざるをえなくなった理由として、二足歩行をし、森を出たことがあげられている。環境の変化である。草原は、森よりも危険であった。大型肉食動物などの捕食動物の危険をくぐり抜けなければならなかった。さらに協力を強力に推し進めた要因があった。出産である。二足歩行によってホモ・サピエンスの出産は難産になった。出産のために協力が必要であり、さらには育児も協力することになった。チンパンジーは、出産も育児も母親がひとりで行うのである。しかしホモ・サピエンスにとっては、マイナス材料がプラスになった。二足歩行は出産のマイナスをもたらしたが、自由に行動できるのであり、行動範囲の広さは、食糧を得やすくする。また出産育児の協力によって、多産となり、人口を増やした。人口が増え、多くなると、発想が豊かになり、知識や技術の伝授が頻繁に容易に行われるようになる。二足歩行をして森を出て経験する環境の変化は、飛躍をホモ・サピエン

スにもたらした。環境の変化を、ホモ・サピエンスは創意工夫によって乗り越えたのである。

その後、74000年前に、ホモ・サピエンスは環境の激変に直面した。それをもホモ・サピエンスは、乗り越えたわけであるが、どのように乗り越えたのか。

ホモ・サピエンスが直面した環境の激変は、インドネシア・スマトラ島のトバ火山の噴火であった。過去 10 万年間で最大の噴火であった。地球全体が噴火による雲に覆われたという。気温が下がり、生物はそれまでにない寒さを経験した。雨の減少で植物が枯れ、食物が尽きかけたとき、ホモ・サピエンスは、どのようにこの危機を乗り越えたのか。一つは、ホモ・サピエンスのもつ攻撃性によって、他の集団を攻撃し、生き残ったホモ・サピエンスが現代につながっているというもの。取材班は、その説をとらず、協力によって生き残ったという説をとる。「ものづくり文化」の視点からも、興味深い説なのであるが、東アフリカのマーモネット遺蹟で発掘された黒曜石という「もの」が、協力説を裏付ける。その発掘された黒曜石は、ナイフや矢じりとして使用されたものであるが、その遺蹟から 10 キロ離れた地域で産出される黒曜石は、トバ火山噴火の前後で、発見地域が異なるという。噴火後には、広範囲の、生活範囲を越えた地域でも黒曜石が発見されている。これは、噴火後には生活道具として使用される以外に、友人関係の構築のために使用されたのではないかと推測されるのである。その論拠として、現代人の根底にある利他性に注目し、取材班が 2010 年に、現代でも 74000 年前のホモ・サピエンスと同じような生活を送る狩猟採集民のハザの人々に行った独裁者ゲームの結果をあげている。ゲームは、二人のプレイヤーの間で、一人が自由に取り分を決定できるというもの。サバの人々の結果は、自分が 70% もらい、相手に 29% 渡すというのが平均的な結果であったという。その結果を受けて、次のような説明がされている。

私たちはチンパンジーのようにには行動しません。彼らは可能ならすべて自分のものにします。また、相手の申し出を拒否することはありません。彼らは常に受けとります。でも、ヒトは、どんな社会でも、・・・そんなことはしません。ヒトは、まったく必要のないのに与えます。そして、適当であると考えている量がもらえないと腹を立てます。このゲームで、見知らぬヒトには何もあげない事例は、いまのところ、私たちはどの社会でも見ていないのです。(120)

このゲームの結果で驚くべきは、現代アメリカ人の結果である。ハザの人々よりも、より多くを分かち合おう

としたのである。そのような利他性は、東日本大震災でも見られ、多くの事例がある。その典型として、「いま『よく生きる』とは」と題された被災者の次のような言葉³⁾にも見出される。

では、何を喜びにして生きるのか。それは、他者との交わりである。他者を愛すること、他者を助けること、他者から助けられること、それが人間の喜びである。・・・逆説的にも、この大災害のときに、明らかになかったのではないか。

そして国を越えて災害者に支援があったと次のように言っている。

すべてを失った人びとが身を寄せ合って助け合っている姿、外国からさえ人びとが助けに来る姿—北方四島の帰属問題で関係が冷えていたロシア、尖閣諸島の同じ問題で険悪な関係に陥っていた中国、これらの隣国が救援隊を送ってくれたニュースを、重く受け止めなければならない—ここに人間の生の根源の姿がある。

世界的な形で、「分かち合う心」によって国際協力が実現した。東日本大震災によって、人間の黎明期における「人間の心」が現代にも継承され、現代人の心の根底に脈打っており、人間の黎明期の姿に通じる、現代人の「生の根源的な姿」が確認されたのである。

5. 「ものづくり文化」による生き残り

『ヒューマン』の第 2 章は、「投げる人・グレートジャーニーの果てに～飛び道具というパンドラの箱～」がテーマである。「ものづくり文化」的視点から見て興味深いのは、投擲具である。ホモ・サピエンスは、誕生地であり、生息地であったアフリカを 2 度出た。「出アフリカ」である。その 2 度の「出アフリカ」の証拠が、イスラエルのカルメル山に残っている。最初の「出アフリカ」は、6 万年前である。現在も二つの民族が争うその地で、ホモ・サピエンスはネアンデルタール人に出会った。ネアンデルタール人とは、ホモ・サピエンスの兄弟か従兄妹にあたり、アフリカにいた同じ祖先をもつ。60～50 万年前にアフリカを出た一団の子孫たちであった。かれらとカルメル山周辺で共存していたはずのホモサピエンスの痕跡が 7 万 4000 年前になると消えてしまった。その地はネアンデルタール人の支配地域になったのである。2 度目の「出アフリカ」も同じ地域を舞台とし、

4万年前から1万年前の遺物が残っていた。しかし第1回目の「出アフリカ」で遭遇し、その地域に続けたはずのネアンデルタール人の痕跡が4万5000年前に消えたのである。その地域は、2回目の「出アフリカ」をしたホモ・サピエンスの支配地域となったのである。どうしてそのようなことになったのか。そのような変化をもたらした「もの」が、投擲具である。

ホモ・サピエンスが最初に「出アフリカ」をした頃、地球は寒冷期で、北方にいたネアンデルタール人は南下する生物を追って南下した。ネアンデルタール人は、北方系の頑丈な体つきをしており、ホモ・サピエンスは華奢な体格をしていた。第2回目の「出アフリカ」をし、結果的にその地を支配することになったホモ・サピエンスが頑丈になったわけではない。華奢で、脆弱であった。しかし投擲具を開発していた。2回目の「出アフリカ」をしたホモ・サピエンスの遺物には、石刃と呼ばれる石器があった。石刃は薄く、簡単に大量につくれるもので、矢じりとして棒の先端につけ、先に石刃のついた棒は投擲具として使用された。それによって、小型動物を素早く仕留められ、遠くからでも仕留められた。ネアンデルタール人もかなりの技術をもっていたが、投擲具は開発せず、強靱な体力で大型動物を接近戦で仕留めていた。体力に劣るホモ・サピエンスは、投擲具によって小型動物を食糧として生き延びたのである。第2回目の「出アフリカ」をしたホモ・サピエンスとネアンデルタール人の戦いは、「文化」と「身体」の戦いであった。ホモ・サピエンスは、身体能力ではなく、道具開発による「ものづくり文化」によって、生き延びたのである。

寒冷化が進む環境のなか、熱帯仕様の私たちホモ・サピエンスが、寒冷地仕様のネアンデルタール人を駆逐していくという事態は、それまでの生命の掟からいえば、相当に例外的なことだ。逆にいえば、この勝利は人間が今までの生物と違い、文化の創出—新しい行動、新しい工夫、そして、新しい心—によって、勢力を広げていく生物になったという高らかな宣言なのである。(142)

「ものづくり文化」によって投擲具を開発し、ホモ・サピエンスが勢力を拡大し、全世界に広がっていくことになる根本原因は食糧不足であったとも言われている。投擲具によって食糧を大量に得ることができるようになり、人口はさらに増加し、さらなる食糧を求めてホモ・サピエンスは移動していき、全世界に広がっていった。人口が増加し、集団が大きくなれば、発想が豊かになる。その豊かさが、投擲具開発にもつながっていたの

である。

集団のネットワークが、大きくなると、問題に取り組む人数が増え、新しいアイデアが次々に出やすくなります。それがもっとも発揮されるのは、氷期のような気候変動に見舞われた場合です。仲間が集まって『さあ、どうしようか』と頭をひねっても、そうそういいアイデアが出てくるものではありません。それよりも大勢でアイデアを出し合い、片っ端から試してみればいいのです。たまたま、うまくいく方法があれば、みんなですべてを真似する。つまりは数が勝負なのです。

(189)

開発した技術が衰退するのは人口が少ない場合であるという。開発が起こり易いのは、人口が多い場合である。そして技術の伝承も人口が多い場合の方が有利である。人口が多い場合、発想も豊かである。発想も自由である。その自由さが、ときに問題となる。秩序を乱す発想も生まれ、行動も出やすくなる。そこで問題となるのが倫理である。小集団であれば、今までのように「分かち合い」という倫理でよかったのであるが、集団が大きくなれば、それではすまなくなる。秩序を乱す者を罰する必要が生じてくる。その罰の道具として、投擲具が使用されるようにもなっていく。しかし取材班は、人間の闘争性に比重をおく見方を排して、投擲具という飛び道具が、隣人を傷つけるために使用されたのは少なかったという次のような説明文をあげている。

飛び道具が私たちの種にとって有益であることは明らかです。これまで住むことのできなかった場所での生活を可能にし、さらに進化の競争相手を消滅させるのに役だったかもしれません。しかし飛び道具のマイナスの面もあります。それは私たちが十分に知っていることですが、社会的な問題、つまりは戦争や犯罪に利用されることです。しかし、考古学的記録の長期的見解や歴史の理解にもとづけば、飛び道具は家族に食糧を供給するために使われた可能性が高く、隣人を傷つけたり、問題を起こすために使用された可能性は低かったのです。飛び道具の悪用は最近の現象です。

(217)

狩猟採集を生存手段としている限り、絶対的に安全に食糧を得ることは難しく、集団とともに生きるのがベストであり、その秩序を乱すのは生存を危うくしかねないという状況が続いていたことを思えば、むやみに隣人を害することも頻繁には生じなかったと思われる。

6. 「ものづくり文化」と想像力

『ヒューマン』第 3 章は、「耕す人・農耕革命～未来を願う心～」がテーマである。この撮影が始まろうとするとき、2011 年 3 月に、東北地方太平洋沖地震が発生し、東日本大震災が起こった。この章の「ものづくり文化」的テーマは、農業であり、小麦の生産である。

まず注目される遺蹟が、トルコのイスタンブールを経て到達できるハラン高原北端にあるギョベクリ・テペ遺蹟である。遺蹟の年代は 1 万 1600 年前から 1 万 8000 年前とされる。この遺蹟は、「非日常の施設であり、葬式など儀礼のための施設であるとともに、広い地域に住む人々が集団の枠を越えて共同で利用する施設」(230)でもあった。この施設は、宗教的な施設であったと思えるが、「人々が自然を利用して造ったものです。自然が背景にあります、そこに人々はさまざまな手を加えました。それが特徴です」(231)という。過去の洞窟で動物が描かれていたが、人はほとんどないか、あっても人間と動物は同じレベルであったが、ここでは、人間が上位にあるという。この遺蹟は一つの大転換を示すもので、「すべてが平等である精霊信仰の世界から人間のような生き物が上位につくような宗教が始まったのは、人類の歴史で初めてのことだと認識できます」(232)という。万物を平等におく平等思想がなくなり、人間を上位におき、王が出現する社会がここから始まっているのである。1 人の王が出るのは、その社会に格差があることが前提である。格差を闘争を生む。

この遺蹟のつくられた 1 万年前は、闘争が盛んになった時期でもあり、その背景には、かつての平等な狩猟採集生活でなく、1 万 4000 年前頃より気候が温暖湿潤になるにつれ、森林は豊かになり、果実が豊かに実り、生き物も多くなる。そして定住の生活が 1 万 3000 年前に始まっており、定住しながら狩猟採集生活を進めていくうちに縄張りができ、縄張りやそれぞれの領域の確立とともに闘争も増えてくる。闘争が増えると融和の場所を求めようになる。そのような状況のなかで、ギョベクリ・テペ遺蹟は、様々な集団の融和の場所であったのではないかと。人々は集まり、コミュニケーションを図り、交流し、物資を交換し、融和を図る。それは、一種の宗教施設となる。そのような交流の場では、大切なもの、効果なものを与えて融和をはかる。その大切なものの一つが麦であったのではないかと。麦の栽培は、そのような祭儀における重要な「もの」を得るために始まったのではないかと。ギョベクリ・テペ遺蹟のそばに小麦が自生しており、それを栽培化した。それが一つの農耕の起源となる。宗教的な意味を備えた融和を図る互いの捧げも

のの意味を備えた「もの」なのである。それは、その背後に闘争の危険を察知したホモ・サピエンスの防御精神がある。

定住して縄張りができた社会では、かつての、移動による、その日暮らしの狩猟採集にあった平等性はなく、「分かち合う心」だけでは生きていけないのである。それぞれの集団に忠実な、無私な者は他の集団に対して闘争的になることがある。その危険性をやわらげるために、融和の地を設けて、互いの交流をはかったのである。小麦は、その中で、融和のための効果な、大切なものという意味を担っていたのである。

そして農業が始まることによって、ホモ・サピエンスには、そのとき、その場だけの「思い」でなく、将来を見通していく心が生まれた。想像するといってもよい。想像力が目覚めたのであり、これはチンパンジーにない能力であった。チンパンジーは目の前の世界に生きていて、100 年前、100 年後のついては考えない。瞬間的記憶能力はすごい。そのチンパンジーの世界を捨てて、人間は人間になった。

人間は瞬間記憶を失う代わりに、未来に向けて想像力を働かせたり、将来にわたる計画を立てたり、あるいは自分がした事実を、言葉などを使って仲間に伝える。そういった心の働きを担う脳を発達させたのだと思います。(308)

チンパンジーは、瞬間に生き、絶望もしないし、希望ももたない。人間は、想像力をもつので、絶望もし、希望ももてる。農耕は、そのような「人間の心」を生み出したのである。

7. 「ものづくり文化」と信頼による交換

『ヒューマン』第 4 章のテーマは、「交換する人・そしてお金が生まれた～都市が生んだ欲望のゆくえ～」である。安定して食糧を豊富に得ることができ、人口も増加したホモ・サピエンスは、古代文明の黎明期を迎える。メソポタミア文明の発祥の地であるシリア北東部には、6200 年前、紀元前 4200 年頃に、すでに都市が栄えていたことを示すテル・ブラック遺蹟がある。そこからの出土品から、そこには工房であったとされる。出土品のなかで、「ものづくり文化」的視点から、注目されるのが鉢である。その鉢は、すでに「お金」の役割を果たしていた麦を測る一種の給料袋だった。これは、給料システムが存在し、日常生活を支える食糧を自分で得ずとも、工房の仕事を一日勤めることで、給料を得て、それによ

って食糧を得られるシステムができあがっていたことを示す。分業もされていた。いろんな職業の人が分担して役割を果たし、その成果を共有して都市生活を営んでいた。「お金」による給料や分業などのシステムは、交換システムであり、その根底には信頼がある。チンパンジーは、交換ができない。食糧は自分のもの。人間だけが交換できる。都市を生み、繁栄に向かう一つの大きな原動力とは何かという問いに対して次のような答えがあげられている。

私は交換の発明だと思います。初期の都市は、まさに交換が発展した場所です。交換ネットワークに入った職人たちが、自分の道具をつくるための道具を開発し、自分の商品をつくるのに役立つ技術に投資しました。そして、文明が誕生しました。興味深いことに、都市文明の崩壊の時期には、こうした交換や分業が後退する様子が見られます。メソポタミアの一大都市やローマ帝国の滅亡の後、ヒトは自給自足の生活に戻り、熟練した技能の一部は失われます。それは、人があらゆることを、少しずつ自分でやろうとするからです。交換と繁栄は、互いに呼応しあっているのです。(339)

交換ネットワークによって発明された技術や道具を集団のものとし、人類の「集団的頭脳」を形成していくところに、人間の凄さがある。ネットワーク化された頭脳のなかで、アイデアが交換されることで、爆発的な文化的進化を遂げた。そのアイデア交換において、「1人1人が均質であるよりも、違うことに価値がある。それだけ、集団的頭脳を多彩にするからだ」(340)と言われるように、1人1人の個性、多彩な個性が大切なのである。

その個性重視は、危険な要素も内蔵している。ギョベックリ・テペ遺蹟で指摘された「人間を上位におく」思想の存在である。人間を上位におき、さらに1人の王の出現する社会は、格差のある社会である。都市社会は、格差社会である、格差社会は、かつての狩猟採集生活時の平等社会でない。平等社会でないところには争いが生じる。テル・ブラック遺蹟には、都市の繁栄を示す豊富な出土品に交じって、大量の人骨が発見され、大殺戮の痕跡が見出せるという。交換が都市を豊かにし、繁栄させる個人の自由な発想は、個人の欲望を限りなく膨らませてゆく。そこから現代へは、一直線であるように思える。

人間の際限のない欲望、それに伴う人間同士の闘争を指摘しながら、取材班は、あくまでも、「分かち合う心」の存在に固執し、格差を嫌う心が脳に刻まれていることを探る実験結果についての次のような説明をあげてい

る。

私たちは40人を対象に実験を行いました。人種や年代を超えて同じ傾向が見られました。・・・おそらく人類は、長い時間をかけて平等と助け合いを重んじる心を進化させてきたのでしょう。これは、人類がそうしなければ生き延びられない環境で生きてきたからなのだと思います。(352)

「分かち合う心」か闘争か、それに対する答えは、人間相互が闘争して互いに生き延びられないような環境の激変に見舞われた時に見つかるのかもしれない。

『ヒューマン』のテーマの一つは、「環境変動との相克」であった。人間は、誕生以来度重なる環境変動に見舞われている。都市生活を確立し、繁栄を誇ったメソポタミアも、紀元前2400年に食糧の収穫量が激減する事態に直面している。人口増による作物の過剰作付により塩害が生じたためである。これは都市という人工環境による環境変動である。この人工環境によって人間が危機的状況に追い込まれるのは、現代の原子力発電の危機に明らかである。東日本大震災は、自然の環境変動であり、原発による人工環境変動に人間が直面した事態である。人類発生以来、さまざまな環境変動を、生き延びてきたのであるが、この東日本大震災による環境変動をいかにして克服するか、今、問われている。「分かち合う心」か闘争か、今、問われているのである。

8. おわりに

演出家の蜷川幸男が、2012年の末に、イスラエルでギリシア悲劇「トロイアの女たち」を上演する予定で、その上演される劇は、ユダヤ、アラブ、日本の役者がそれぞれの言語で演じる「他者と共存の実験になる」というが、その蜷川へのインタビュー記事⁴⁾が、「中東 3・11 そして演劇」と題して掲載された。「三つの民族、言語で演じるこの意味は？」と問われて、蜷川は、次のように答えた。

演劇は、人間同士がコミュニケーションしなければ成り立たない。異質の言語が飛び交う中で、必死に相手の言うことを聞こうとする。鋭敏な感覚で、言語の裏側にある内的な言語に到達することが求められている。それが我々が日常怠っている根源的なものを求める力になっていく。そのことが唯一の希望です。

現代のイスラエルでは今も戦闘的対立が続いている。対立しているユダヤ人とアラブ人を代表した役者が舞台上で出会い、演じる。この状況は、『ヒューマン』を読み進めた我々には、いくつかの状況と似ていると思える。イスラエルの近くのギョベックリ・テペ遺蹟は、いくつも異なった集団が集い、コミュニケーションをはかり、交流と交換をする場所であった。かつての移動する狩猟採集生活から定住生活に移り、縄張り、領土意識が芽生えて、争いが頻繁になり、「融和」の必要性を感じて、つくられた場所であった。そこでのコミュニケーションを想像させるような蜷川の試みである。根源的な場に遡って人間の闘争を克服しようとしているのである。蜷川は「現代史の、まったく中に飛び込んでしまおう」と考えている。蜷川は東日本大震災も意識しており、中東問題、ギリシア危機、日本の東日本大震災等「今こそ全部それを洗い直す、考え直すスタート地点だ」と考え、「放射能危機、あれは『起きた』のではなく『起こした』んだよ」という蜷川は、そういう状況で、あえて悲劇をすることの意味は？」と問われて、次のように答えている。

悲劇から希望を見いださない限り、悲劇をやる意味はないと思う。嘆くこと、怒ることは人間が回復するためにあるんじゃないかという気がする。悲劇的な時に喜劇をやるのではなく、より悲惨な現実の中だからこそ希望を発見できる。

『ヒューマン』を読んできた我々には、人間がチンパ

ンジーと違う特質として想像力をもつようになったことを知っている。想像力をもつゆえに、我々は絶望もし、希望ももてる。悲劇を見て、そこに希望を見出す可能性はある。

ギリシア悲劇は、宗教的祭儀に上演された。それと同じような意味をもって、我々は根源に立ち返り、その舞台を今、共有して、これからの生き方を思うべきなのである。蜷川は、「個々の違いを残しながら、集団的には統一性を持たせるにはどうしたらいいか」と自問しながら、やっていくと言う。これこそ、我々が常に問わなければならない、人間の根源的問いである。

過去 20 万年に渡って、人間は危機的状況を乗り越えてきた。困難な状況のなかで、「もの」を生み出しながら、生き延びてきた。人間の精神的働き、人間の心の働きによって、現代の危機も必ず乗り越えられるはずである。

註)

- 1) 大垣昌夫, 亀坂安紀子: 震災後の価値観, 日本経済新聞, 2012 年 3 月 2 日朝刊.
- 2) NHK スペシャル取材班: ヒューマン なぜヒトは人間になれたのか, 角川書店, 東京, 2012.
本文中の () 内の数字は、本書の頁数を示す。
- 3) 岩田靖夫: 人間愛の社会へ, 世界, 5 月号, p. 67, 2011.
- 4) 石合力: 中東 3・11 そして演劇, 朝日新聞, 2012 年 2 月 4 日朝刊.

(受理 平成 24 年 3 月 19 日)